

諸山縁起

桜井徳太郎校注

修験道の成立展開に重要な役割を果たした大和の靈峰、大峯・葛城・笠置の縁起を説いたもの。底本は宮内庁書陵部所蔵の九条家旧藏本で、袋綴からなる一冊、他に類書がみられない。成立年次を確定するのはむづかしいけれども、巻末に慶政(九条良経の男、一六九—二三六)の奥書があり、また本文中に建久三年(二二九三)の年次や、熊野別当湛快(承安四年(一二三四)寂)・湛増(寿永または文治の頃別当となる)の名がみえるので、もしも奥書のごとく慶政の所蔵であることが確かならば、鎌倉初期かそれ以前に編集されたとみてよい。但し三つの峰々に関する叙述は不整合であり、各々の文の成立時点に参差のあることは疑いえない。恐らく各人の手によって成ったものを、後に集大成したからであろう。金剛・胎藏両界の曼荼羅を現実の山岳にいちいち比定し、その具体相を略記しているのが、平安期における修験者による山中抖擻の実相を追究するためには、またとない貴重な資料となる。本縁起の構成はかなり錯綜しているので、便宜的に全体を二十項に分け、本文の各項の初めに(第〇項)と記した。すなわち第一項より第十二項、第十五項より第十七項、および第十八項後半は大峯・金峯山(関連する役行者の伝説や熊野別当次第を含む)の縁起・記録など、第十三・十四項および第十八項前半は葛城山についての、第十九・二十項は笠置山についての、縁起・記録である。なお刊本には図書寮叢刊「諸寺縁起集」所収のものがある。



大峯の金剛童子の御名 第十一項の「大峯の金剛童子の次第、住所の日記」参照。異なる所を頭注に示す。

吹越 後世童子の住所は第十一項では「多輪の宿」とある。

多輪 第十一項では「吹越」とあり、後世童子と逆になっている。

手巻 玉米。
香精童子 香正童子。
拾増童子 檢始童子。
五岳仙 一補

一代峯縁起 一補
道賢 一九二頁補「日藏」

大倭国 大和国(奈良県)に同じ。

信山 未詳。

白鳳十二年 一補
拳登「樂登」の誤字か。以下同。

生中 第十六項に、後行者が七度生をかえ、前生の骸骨を見たことなどが記されている。

金剛界峯 一補
笠置窟 一補

補処の弥勒慈尊 一補
胎藏界峯 第十六項の「熊野山」の条によれば、熊野をさすか。

三部 金剛界・胎藏界の両部に蘇悉地法を加えている。台密で称す。
上宮太子 聖徳太子。

馬惱。瑪瑙。寶石の一種。

大峯の金剛童子の御名

吹越 後世童子。多輪 除魔童子。水飲 慈悲童子。手巻 惡除童子。篠 劍光童子。深

山 香精童子。禪師 檢増童子。笙巖 虚空童子。

五岳仙

地主仙、持経仙、竜角仙、如意仙、摩尼仙。

三百の仙人の内、五岳仙を以て上首となす。

(第十九項)

一代峯縁起 仏子道賢、今日藏と号す。

それ大倭国の東北の楞を以て高山あり。名を一代峯と曰ふ。前後に信山あり。その中に

禪僧の數五百余人あり。これ則ち他人に非ず。弥勒・觀音の化身なり。ここに役優婆塞は

金剛山の行者なり。去る白鳳十二年の夏四月廿二日を以て、始めてこの峯に拳登し修行す。

生中の間第七度なり。そもそも今のこの行者は、昔は大倭州の聖人、今は大唐国の第三の

仙人、金剛山の法起菩薩なり。金剛界峯、果曼荼羅、金峯山は大聖威徳天。蘇悉地峯、一

代峯・笠置窟は補処の弥勒慈尊。胎藏界峯、因曼荼羅なり。三部の秘法の峯かくの如し。

一代峯の極めの事は金峯山縁起に垂れらる。今この峯に仙宮六所あり。これに因り、上

宮太子、如法經五部を書写するに、一所に安置し、七重の馬惱の石塔を造りてそれに内め

給ふ。その塔の本に黒白の石あり。その数を知らず。ここに役行者、隨喜の意を至して信

兜率天 欲界六天のうちの第四天。

その内院は、将来仏となる菩薩の住処で、現在は弥勒菩薩が説法している淨土であり、四十九の摩尼宝殿（四十九院）があるという。ここに往生しようとする兜率天上生信仰が広く行なわれた。外院は欲界の天衆のいる所で、淨土ではない。

知足天 兜率天に同じ。

僅かに二百余歳 白鳳十二年から延喜八年までをいうのである。阿婆縛抄には「経二百余歳」。

延喜八年…九〇八年。↓補十二時 一晝夜。

僅かに四百余歳 阿婆縛抄には「経四百余歳」とある。

天魔 天子魔。他化自在天（欲界の第六天）に住む魔で、仏法をさまざまの善事の邪魔をする。

生々世々 生れかわり死にかわりして、未來に幾千萬もの世を経ること。

虚空蔵の石屋の竜穴 ↓補

洛又 梵語の音写。数の単位で、十萬とされる。密教で陀羅尼を唱える数を一洛又、三洛又などとする。

椿木寺 椿山寺。扶桑略記第二十五

天慶四年条に引く道賢上人冥途記に

「初入此金峰山、即於発心門椿山寺剃髮改衣」とある。今の吉野竹

林院の地といわれる。

心を発し、笠置壱に於いて両部の如法経を書き、石中に安置し給ふ。仍つて天人聖衆下

りて供養し奉る所なり。その供養今に絶えず。かの金峯山はこれ兜率天の内院にして、今

のこの一代笠置峯は兜率天の外院なり。この峯に一度修行する輩は、必ず知足天に往生し

極楽に於いて自在を得んか。全く以て疑ひあるべからざるか。その後来たり去るに於いて

は、僅かに二百余歳なるのみ。改めて今、仏子道賢修行の事、生中の間第九度なり。今始

めて延喜八年の秋八月十二日を以て、笠置壱に奉登し五七日籠る。その間三部の秘法の曼

茶羅を十二時勤修す。その間天人の供養を得。

天人、仏子に告げて言はく、「この下に池あり。縦広四十里にして、池の内に七宝満ち、

池上に石像の慈尊あり。僅かに四百余歳なり。もしこの地に於いて至心に法の如く修行せ

ば、必ず極楽世界に往生し、現在は所願に随ひて財宝を与へんか」と。仏子問ひて曰はく、

「この峯に修行する者は、必ず天魔の難を除き、また心中のおの願ひを成就するや」と。

中等答へて曰はく、「この土に來たる者は生々世々在々処々の間、我等守護し、また

たその心中の所願を成就せん」と云々。

仏子いよいよ信を發し、我が身の皮を剥ぎ、三部の大法の秘密曼茶羅を圖繪し奉り、以

て虚空蔵の石屋の竜穴の中に小一里許り入る。然る間、石門あり。堂の戸を開きてこれを

見るに、大日の宮殿あり。且く思惟する間、持咒三洛又を満たす。その時、宮殿の内より

二人の鬼神出で來たる。問ひて曰はく、「汝は何者なるや」と。仏子答へて曰はく、「日本

国金峯山の椿木寺に住む沙門道賢なり」と。返りて問ひて曰はく、「君は誰れ人なるや」と。

天童子 天童。童形を現じて仏法を守護する神。

伴 後に「伴峯」とあるが、未詳。

両部の大乘経 両部の大経か。両部の大経は、大日経と金剛頂経をいい、密教の根本經典。

転読 広義には經典を説誦すること。普通は、大部の經典の初中終の數行のみを読み、あとは経を繰つて説経に擬すこと。

三部の峯 金峯山・笠置山・熊野の三山。

耆闍崛山 靈鷲山・鷲峰山と訳す。中インドマガダ國の首都王舎城の東北にある山。釈尊説法の地として有名。

戊亥 北西。

高声童子 金剛童子をさすか。証菩提山には、大家金剛童子次第住所日記に「高声童子香正童子」とあり、大家八大金剛童子の一、香精(正)童子と関係あるらしい。

延喜十六年 九一六年。

峯間の宿所卅所 この三十カ所の宿は、笠置山近辺の修行の宿と考えられる。

と。答へて云はく、「我ら二人は天童子なり」と。仏子また問ひて云はく、「この土は何れの所なるや」と。二天答へて云はく、「この土はこれ兜率天の外院なり。これに因り慈尊の聖なる御躰を顕はし奉る」と云々。ここに仏子いよいよ信を致し、強ちにこの所に於いて図繪の三部の大法の曼荼羅を安置し奉ること已に畢ぬ。

この石屋を出でて後、この峯に修行し給ふ間、伴に仙宮あり。この内に両部の大乘経を説誦する僧坐す。聖人これを見て、随喜の意を發し首頂を摩して云はく、「我、人と共に両部の大乘を転読せん」と云々。伴の伴峯の西面の滝の上に石門あるなり。僧云はく、「我が身他國にありといへども、心は常に三部の峯にあり」と云々。伴の僧は昔の役行者、第三の仙人なり。ここに行者・日藏の兩人、「我等、この峯に住みて末代の行者を守護せん」と云々。当山はこれこの土の地に非ず。但し耆闍崛山の戊亥の角闕けて、この土に來たるなり。その時、他國の高声童子、常にこの山に來たるなり。六人なり。その間、金峯山の高声童子二人渡り給ふ。滝蔵に一人、今一人は峯間にあり。行者を随意に守護し給ふ。並びに八大童子と成ると云々。

始め延喜十六年五月十二日にこの縁起を顕はすなり。

(第二十項)

* 峯間の宿所卅所と云々。

一、楊子町、字ウツタキ。二、阿弥陀(千五丁、峯)。三、西方(千八丁、峯)。四、大般若(廿丁、東)。

この峯 笠置山であらう。

機根 機ともいう。縁にあつて発動すべき可能性。仏の教化をうけるものに備わる能力・素質をいう。

慶政 「猪熊本比良山古人靈託勸註」によれば、九条良経の子で道家の兄幼時不具となり出家したという。三井寺で修行し建保五年頃入宋、のち西山に法華山寺を創建して住む。証(勝)月房と号す。往生伝などの書写が多く、「閑居友」の作者と考えられている。文永五年(三六〇)夜、八十歳。平林盛得(慶政上人伝考補遺)、「国語と国文学」昭和四十五年六月号参照。

行蓮公 未詳。尊卑分脈・公卿補任などにも、該当する人物が見当らない。

源少納言信実 同右。

五、国見(十丁、酉)。六、石本(卅丁、恵)。七、如法(六丁、恵)。八、岡本(十八丁、酉)。九、辻(廿丁、酉)。十、尾上(十六丁、東西水なし)。十一、手車(十丁)。十二、弥勒(十五丁)。十三、往生院(廿丁)。十四、堂本(廿五丁、峯)。十五、最勝(五丁、酉)。十六、如意(一丁、東谷)。十七、法花(廿丁、酉)。十八、普賢(三丁、酉)。十九、金剛(十丁、酉)。廿、峯(十五丁、恵)。廿一、椿木(十丁、酉)。廿二、無量(廿丁、酉)。廿三、今御竹(廿丁、酉)。廿四、滝本(十丁、酉)。廿五、石上(十二丁、恵)。廿六、郷見(十丁、恵)。廿七、石屋室(廿丁、恵)。廿八、松本(十三丁、酉)。廿九、井本(十一丁、恵)。卅、長谷峯(十丁、恵)。

但し、この峯に南北両山ありといへども、南山に於いてはこれを除く。その故は末代の行者、機根に堪へざる故なり。その意の起りは、南山の中に十余丈の黒き蛇あり。人を見て極めて悦ぶ。後に大鬼王と成る。字冠(タケニアリ)。その峯の頂より十五町に池あり。色は赤白なり。黒白の蛇その数を知らずと云々。

已上、本の如く写し了んぬ。慶政本なり。

已上、行蓮公(源少納言信実の孫なり)を以てこれを書写せしめ了んぬ。

但し文字の尤も不審なるは、すべからく他本を請ひてこれを交勘すべきのみ。

慶政本なり。

(第十七項)

一 峯 宿

熊野宿 西方々 備々 粟谷々 備別所々 八重々 吹越々 相
 西々 山西々 黒坂々 烏摩馬々 垂子々 金剛多輪々 般若々
 安日々 水飲々 陽甲井々 玉木々 宇河々 道気々 古屋々
 恩智々 林々 星々 霧々 高屋々 東屋々 八重々 苔フ久輪
 々 金地々 仙洞々 雨木々 瑠璃々 覺輪々 奇々 五胎々
 塔印々 智恵々(又ウタノトマリ) 平地々 多宝々(又云持経者)
 箱々 朴々(又云如来) 小篠々 池々 深多輪々 仙行寺(々) 武
 清々 神仙々 空鉢々 劍嶽々 十功德々 教経々 楊枝々 禪
 師還々 鈴法々(大行者) 車路々 教法々 吉野熊野々 皮走々
 小池々 横尾々 小種々 劍御山々 柏兎々 七池々 小宿々
 大篠々 腋々 小篠々 コケノ々 神福仙々 涌々 鑪懸々 石
 林々 鞍懸々 智有々(寺祇園也) 観音々(□七高也) 法淨仙々(青
 篠也) 当熟仙々(祿也) 戒経仙々(野除也、劍光童子申) 王就仙
 (々)(丹治坂本也、金剛童子)

(第十八項)

葛本峯金剛童子御名

一 一 乘山 経護童子 須弥頂仏御垂跡

原漢文(諸山縁起)

二 大福山 福集々々 師子相仏々々

三 金剛山 常行々々 常滅仏々々

四 二上峯 集飯々々 梵相仏々々

五 入江 宿着々々 度一切世間苦惱仏々々

六 鳴滝 禪前々々 須弥相仏々々

七 二宿 羅網々々 雲自在王仏々々

八 金剛山 未出光童子 涌出口御座

東北方仏名壞一切世間怖畏、第六我尺迦牟尼仏云々

信雅僧正御房御注記云々

大峯金剛童子御名

吹越 後世童子 多輪 除魔童子 水飲 慈悲童子

手卷 惡除童子 篠 劍光童子 深山 香精童子

禪師 檢増童子 笮巖 虚空童子

五岳仙

地主仙 持経仙 竜角仙 如意仙 摩尼仙

三百仙人之内以五岳仙為上首

(第十九項)

一代峯縁起 仏子道賢、今号日藏

夫以大倭國東北楞在高山、名曰一代峯、前後有信山、其中有禪僧數五百余人、是則非他人、彌勒觀音化身也、爰俊優婆塞金剛山行者、去以白鳳十二年夏四月廿二日、始奉登此峯修行、生中之間第七度、抑今是行者昔大倭州聖人、今大唐國第三仙人金剛山法起菩薩、金剛界峯果曼荼羅金峯山大聖威德天、蘇悉地峯一代峯笠置庵補陀彌勒慈尊、胎藏界峯因曼荼羅、三部秘法峯如是矣、一代峯極事金峯山緣起被垂矣、今斯峯有仙宮六所、因致上宮太子如法經五部於書寫、一所安置造七重馬惱石塔其內給、其塔本有黑白石、不知其數、爰俊行者至隨喜意發信心、於笠置礪內部如法經書安置石中給、仍天人聖衆下所奉供養也、其供養于今不絕、彼金峯山是兜率天內院、今此一代表笠置峯兜率天外院也、此峯一度修行輩者、必往生知足天得於極樂自在乎、全以不可有疑歟、其後於來去僅二百余歲耳、改今仏子道賢修行事生中之間第九度、今始以延喜八年秋八月十二日、笠置礪登五七日籠、其間三部秘法曼荼羅十二時勤修、其間得天人供養、天人告仏子言、此下有池、縱廣四十里、池內滿七宝池上有石像慈尊、僅四百余歲、若於此地至心如法修行者、必往生極樂世界、現在隨所願與財宝乎、仏子問曰、此峯修行者、必除天魔難又心中各願為成就耶、天等答曰、此土來者生々世々在々々之間、我等守護又其心中所願為成就云々、仏子彌發信我身皮剝、三部大法秘密曼荼羅奉圖繪、以虚空藏石屋窠穴中入小一里

許、然間有石門、堂戸開見之、在大日宮殿、且思惟問持咒滿三洛叉、爾時從宮殿內二人鬼神出來、問曰、汝何者耶、仏子答曰、日本國金峯山椿木寺住沙門道賢也、返問曰、君誰人、答云、我二人天童子也、仏子又問云、此土何所耶、二天答云、此土是兜率天外院也、因致奉顯慈尊聖御鉢云々、爰仏子弥致信、強於此所奉安置圖繪三部大法曼荼羅已畢、此石屋出後、此峯修行給問、伴有仙宮、此內兩部大乘經誦誦僧坐、聖人見之發隨意摩首頂云、我人共兩部大乘轉說云々、伴峯西面澆上有石門也、僧云、我身雖有他國心常有三部峯云々、伴僧者昔俊行者第三仙人也、爰行者日藏兩人我等住此峯末代行者守護云々、当山是非此土地、但齋園嶺山戊亥角闕此土來也、其時他國高声童子常此山來、六人也、其間金峯山高声童子二人渡給、灌藏一人、在今一人峯間、行者隨意守護給、并成八大童子矣云々

始延喜十六年五月十二日此緣起顯也

（第二十項）

峯間宿所卅所云々

- 一 楊（十町字ウツタキ）
- 二 阿弥陀（十五丁峯）
- 三 西方（十八丁峯）
- 四 大般若（廿丁東）
- 五 国見（十丁西）
- 六 石木（卅丁東）
- 七 如法（六丁東）
- 八 岡本（十八丁西）
- 九 辻（廿丁西）
- 十 尾

上(十六丁東西无水) 十一 手車(十丁) 十二 弥勒(十五丁) 十三
往生院(廿丁) 十四 堂本(廿五丁峯) 十五 最勝(五丁西) 十六
如意(十一丁東谷) 十七 法花(廿丁西) 十八 普賢(三丁西) 十九
金剛(十丁西) 廿 峯(十五丁東) 廿一 椿木(十丁西) 廿二 無
量(廿丁西) 廿三 今御竹(廿丁西) 廿四 滝本(十丁西) 廿五
石上(十二丁東) 廿六 郷見(十丁東) 廿七 石屋室(廿丁東) 廿
八 松本(十二丁西) 廿九 井本(十二丁東) 卅 長谷峯(十丁東)

但此案雖有南北兩山於南山者除之、其故者末代行者不堪機根故也、
其意起者、南山中有十余丈黑蛇、見人極悅、後成大鬼王、字冠
(タケニアリ)、其峯頂十五町有池、色赤白也、黑白蛇其數不知云々

已上如本写了、慶政本

已上以行蓮公(源少納言信実孫)令書写之了

但文字尤不審須請他本交勘之耳

慶政本

山などを経てさらに北にのびる丘陵の北端、淀川に面して鎮座する石清水八幡宮（京都府綴喜郡八幡町）をさすか。

菩提院権別当上綱（一三〇七）菩提院は興福寺伽藍の南東にあり、玄昉のいた所と伝えられる。上綱は僧職の三綱中の上座をいうが、ここでは誰をさすか未詳。

金剛童子の御名（二三五六）この八体の金剛童子とその住所、垂迹した仏の名は、すでに第十三項の「転法輪山 宿の次第」に出ている。須弥頂仏以下の八仏は、法華經化城喻品に出る十六仏のうちであり、残りの八仏は、第十一項の「大峯の金剛童子の次第、住所の日記」に出る。これらは、大通智勝仏在俗の時の十六人の王子が出家し、悟りを開いて仏となったものである。

五岳仙（二三六四）証菩提山には「五角峰有五人仙人。所謂持咒仙・持養仙・摩尼仙・仍仙・高名仙也。是則五智如来。云云」とある。一二九頁には「五角山」がある。五岳とはこの五角山をさすか。

一代峯縁起（二三六八）一代峯は「大倭国の東北の楞」にあるといい、後文にも「一代笠置峯」とあるから、笠置山をさすものと考えられる。笠置寺縁起（大日本仏教全書一一八所収）にも「一代之峯」とある。この縁起はほほ同文が阿婆縛抄卷二〇二「名所事」に出ている。

白鳳十二年（二三六一）笠置寺縁起には「役優婆塞、白鳳十二年壬申卯月廿四日登当山詣千手窟。則北峯一代之峯始行給者也」とある。

金剛界峯（二三六三）普通には金峯山が金剛界、熊野が胎藏界とされる。笠置寺縁起には「山者非此土之地。者閑福山之靈峯欠落来現。補処弥勒慈尊胎藏界之峯也」とあり、笠置を胎藏界とする。

笠置臺（二三六四）笠置山には笠置寺があるが、この寺は天智天皇の皇子が危難をまぬがれた報恩に刻んだと伝えられる弥勒の大磨崖仏を本尊とし、

弥勒信仰の一つの中心であった。本縁起に笠置を兜率天の外院とし、弥勒仏のことがしばしば出るのもそれと関わりがある。

補処の弥勒慈尊（二三六四）弥勒菩薩は現在兜率天に在るが、釈尊の入滅の五十六億七千万年後にこの世に下降し成仏して、釈尊の済度にもれた一切の衆生を救うとされる。すなわち、釈尊にかわって次の仏になるので、仏の住処を補うという意味で、一生補処の菩薩、補処の弥勒と呼ばれる。慈尊は弥勒の漢訳慈氏の尊称。

延喜八年（二三七〇）これ以下は、笠置寺縁起には、「第六十代醍醐天皇御宇延喜八年戊辰八月十二日。金峯山之沙門道賢日藏上人登当山千手之窟。五七日參籠給。其間三部秘法之曼陀羅十二時令勤行。爰化人告曰。此山有池。方四十里。池之中七宝滿。其池上弥勒御坐。則兜率内院云々。道賢得之被告。弥勒信心致誠祈請。入彼窟詣兜率天。劉骨皮三部大宝之曼陀羅書寫。窟穴之左辺納之。昔役行者如法經二部書給而奉納窟之石中。今亦道賢如法經書寫。而彼靈窟之左辺令奉納之。新得三夫人之供養。種々奇特不遑具記。其後一代之峯令中絶。再開而修行」とある。道賢と役行者が会ったことは出ていない。

虚空蔵の石屋の竜穴（二三七五）笠置寺縁起には、天平勝宝三年（五）実忠和尚が笠置寺の竜穴に入り、北方へ一里余行つて兜率の内院に至った記事がある。東大寺修二会（お水取り）の縁起をのべたものであるが、この記述と似ている。